

【平成23年 7月 広域緊急援助隊交通部隊 男性警察官（41歳）】

「飢えと寒さに耐えた1次派遣」



今回の震災では、地震発生直後に被災地への派遣要請が入り、広域緊急援助隊交通部隊員として、その日のうちに岩手県に出動することとなった。

岩手県へ向かう車両では、営業しているガソリンスタンドが皆無であったため、ガス欠の危機にドキドキしながらであったが、遠野市内のガソリンスタンドで手動で給油できた時には、本当にホッとした。

遠野市にある遠野運動公園に到着したのは、午後10時近くであった。各県警の部隊もぞくぞくと集結して来たが、どこでどんな任務に就くのか分からないまま待機となった。

その後、「大船渡市に向かえ」との命令が入り、深夜、大船渡市に向けて出発した。途中、携帯電話が圏外になり、通信手段も絶たれ、何とも言いようのない心細さを感じた。大船渡警察署に着いたのは、午前0時頃であった。辺りは真っ暗だったが、警察署からは、押し流された車が見え、本当に大変な場所に来たことが分かった。

その日は食事の支給がなく、車の中で仮眠後、午前5時30分から自専道のインターチェンジで緊急車両以外の通行止め規制を実施することになった。大船渡署のパトカー勤務員に案内され、1台3名で配置についたが、地名も迂回路も分からないままの規制は非常に困難を伴った。大変な勤務と感じたが、そのことよりも「母親を捜しに来た」と言う人の対応をするのは、正直きつかった。

その後、自専道の規制が解除となり、警察署前の交差点の交通整理に任務変更となった。勤務体制は3班編制で交替による24時間勤務で、交差点中央に立ち、停止灯をまわし続けた。2日目の夜、小隊長から「食事の支給は期待しないでもらいたい。」との連絡があり、正に山の中などで遭難した気分になった。

広域緊急援助の活動は、72時間という話を聞いていたが、過去に類のない大災害であり、3日で終わるのか、あるいは1週間続くのかと、とても不安になった。

煎餅などが各車両に配分されたが、とても空腹を満たす量ではなかった。1食煎餅1枚、ペットボトル500CC1本で1日を凌いだこともあった。貴重な塩分として包み袋もなめた。

ガソリンも無駄にはできず、仮眠中もエンジンを切り、寒さに耐えた。

苦しい勤務環境ではあったが、被災した大船渡署員が自宅に帰ることもできずに必死に頑張っている姿を目の辺りにして、とても弱音など吐けなかった。第1次派遣は、4日目に交替要員が来て、一旦帰県となったが、大船渡署員のことを考えると、逃げるようなものだとは本当に申し訳ない気持ちになった。